
葬列の子供達

空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葬列の子供達

【Nコード】

N2673M

【作者名】

空我

【あらすじ】

夢がない。

菊池俊介は進路で悩んでいた。周りはすでに進路を決めているのに、自分だけは取り残されたまま、何がしたいのかもわからない。そんな悶々とした日々を過ごしていたが、突然、化け物が現れる。化け物に襲われる生徒達。そして、閉ざされてしまう夢の数。

俊介が怒りを覚えた時、光の戦士に生まれ変わる。

(前書き)

はじめまして。これが初投稿です。

勢いで書いてしまったのですが、周りに読んでくれる人がいないので、ネットで公開しようと思いい発表しました。

皆さんのご批判、ご指摘等がございましたら、ぜひ、お願いします。

俺には夢がない。

菊池俊介はカリカリと鉛筆の音が響く教室で、懨然とした表情で進路の希望表を眺めていた。俊介は特にやりたいことが無く、就職にしろ進学にしろ悩んでいた。

周りを見ると、もう同級生達は書き終わったようである。俊介は溜息をつく、ぼんやりと窓を眺めた。

俊介は学校が終わると早々に、原付を止めてある学校近くのコンビニに向かった。

彼の通っている私立流星高等学校は、バイク通学禁止である。校則を破ることにうしろめたさは感じていない、ただ見つかったときに面倒なだけである。だから、情けなくもこそそこそとコンビニに行くのである。コンビニの人には、申し訳ないと思うから、せめてもの償いでジュースを一本買うのが俊介が決めたルールだ。それでも駐車場に止めることも一時考えたが、今のバイト代ではとても無理だった。

彼はクリーニング屋でアルバイトをしている。と言っても、実家の家業なのだから、家の手伝いといえなくも無い。最初は面倒だったが、原付を買ってもらってからガソリン代が必要になり、買ってもらった恩もありしぶしぶ働くことにしたのだ。

コンビニでジュースを買って外に出て原付を止めてある店の裏手に回りこむと、同級生の片瀬梓が原付に腰掛けていた。

「よっ」

豪快に手を上げる仕草は男勝りで、見た目も女子の制服を着ていなければ男と見間違えそうだった。

「どけよ」

「乗っけてよ。もうバスで帰るのが面倒だもん」

「だったら、歩いて帰れ。俺はこれからバイトなの。大体部活は？」
梓は弓道部に所属しているし、何より主将なのである。彼女にはいつも、そんなんで後輩に示しがつくのかと思うことがあるけど、いざ試合になると好成績を残すから不思議と部活もまとまりをみせているようだ。

「今日は休みなの。まあ、高校生活最後の大会も終わったし、あとはフェードアウトするだけだから」

梓はおばさんみたいに手をひらひらさせながら、そういうと原付から腰を上げる。

「そっか。…そういうえば、今日の進路表書いたか？」

「うん。書いたよ。まあ、やりたいことがないのが悲しいけど、とりあえず大学に進学する」

「なんだよ、それ。真面目に考えてた俺、すっげえ馬鹿みたいじゃん」

「えっ、書かなかったの？」

「まだな」

「まだ決まってるじゃないって、ヤバくない？ もう時間ないよ」

「うるせえなあ。わかってるよ。だから、困ってるん」

俊介はポケットからキーを取り出すと鍵穴に刺して少し回転させると、シートを上げて中の収納ボックスからヘルメットを取り出し、被るとシートを倒して跨る。

キーをスタートに合わせると、スタータースイッチを押す。原付が軽快な音を立てる。

「私もやりたいことが無いし、人のことは言えないけど、とりあえず進学したら？ なんなら私と同じ大学に行く？」

「俺の頭をお前と一緒にするなって。…夢がないって、なんか辛いもんだな」

俊介は思わず本音をこぼしてしまう。話す相手が梓ならなおさらその傾向が強くなる。

「啓太郎さんに相談したら」

「できるかよ、本当の親じゃないんだし。まあ、心配だけはかけたくない。じゃあな」

俊介は軽く手を上げると、原付を発進させた。梓も手を振って見送る。

「心配だけはかけたくないって、そんなところ見たら、心配するだるバカ」

梓の声は誰にも届かず、秋のそよ風に乗って流れていった。

俊介は啓太郎がアイロン掛けした服を袋詰めしていた。最初こそ不慣れだったが、今では目隠ししてもできるようになっていた。元来、器用な俊介は飲み込みもはやかった。

「あの、今日、進路表書かなくちゃいけなかつたんだけど」

「もうそんな時期か。で、どうする気？」

「まだ決まってるじゃない」

「ダメだよ、それじゃ。しっかりと決めないと」

啓太郎は俊介の顔を見て言う。俊介にはその表情が威圧的に見えて、少し腹が立った。

「わかってるよ。どうしても決まらなかつたら、ここを継いでやるって」

「それはお断りだね。こっちは、アルバイト雇ってる余裕もないのに、社員にするなんてとんでもない」

「なんだよ、それ。せつかく啓太郎の夢叶えてやろうと思ったのに」

「あのね、夢つてもものは自分で叶えるから意味があるの」

俊介は啓太郎の夢を聞いたときにおかしくなった。『世界中の洗濯物を真っ白にする』なんて真面目に言っているからだ。

「俺にも夢があればなあ」

「やりたいことがないっていうのは、裏返せばこれから見つけれらるってことなんだよ。俊介の可能性は無限に広がってるんだから。

焦らないで」

啓太郎の優しい言葉に心が少し痛む。それでも何もできない自分が情けなかった。

携帯電話を操作している宇津木豊は、眼鏡を押し上げると時計を見る。深夜をかなり回っている時間帯だった。そろそろ寝ないと明日も学校がある。それでも携帯電話を放せなかった。

彼は流星学園の裏サイトを見ている。そこには誹謗中傷の類が無差別に書き込まれていた。豊は自分に対しての罵倒の言葉に、ただ、字面を見ているだけで悲しいとか悔しいという気持ちは起きなかった。

豊は日ごろからイジメの対象になっていた。そして、心を殺す術を覚えていた。しかし、今の心境はそれとも違う。豊は口元に笑みを浮かべている。

「もう、いいや。こいつらやつちやえ」

何者をも超越した感覚に酔いしれている豊は、掲示板にこう書き込んだ。

『我と心を同じくしている虐げられた者たちよ。今こそ集結のときがきた。』

今こそ、我とともに発起せよ』

そう書き終わると、もう寝ようと決める。明日は長い一日になりそうだと豊はほくそえんだ。

俊介が始業時間ギリギリに教室に入ると、教室は騒然としていた。俊介はこのクラスがというより、学校全体が騒がしいことに辟易していた。

「俊介、今日は何かが起こるぜ」

俊介が眠そうな目を向けると、悪友の今西正樹が立っていた。

「あつそ。だから、こんな騒々しいのか」

「これみるよ」

正樹は携帯電話を俊介の眼前に突きつける。何かのサイトらしく掲示板があった。そこに、書き込みがあった。

『投稿者・オルフェノク』

我と心を同じくしている虐げられた者たちよ。今こそ集結の時がきた。

今こそ、我とともに発起せよ』

「な、なんかありそうだろ。これ、学校の裏サイトみたいなんだけど、このオルフェノクってやつが神みたいない扱いをされているんだよ。それで、この書き込みだろ。絶対なんかあるって」

「お前、そんなもん見てんのか」

「俺も学校にくるまで知らなかったって」

「また誰かに教えてもらって、一緒になって騒いでいたんだろ。あいかわらずミーハーだな」

俊介はころころと周りに合わせられる正樹に感心していた。それは馬鹿にしているのではなく、尊敬すらしていた。正樹の夢は新聞記者になることだと、昔聞いたことがある俊介は、物事の切り替えが早く相手の懐に潜り込むフットワークの軽さを持っている正樹なら必ずなれると信じてもいる。

「まあ、そういうなって。なあ、これ誰が書き込んだんだろうな？

皆の話題はそれよ」

「誰でもいいよ、興味なし」

「つれないねえ。今のところ、あいつじゃないかってことになってる」

正樹が指差した先には、誰もいない席があった。そこは転校生の

席だった。2学期から転入してきた。

「そんな暇してる奴には見えないけどな」

「いんや、あいつだね。普段から喋らないところが怪しい」

噂の転校生がドアを入ってくる。タイミングがいいのか悪いのか。クラスの連中は、一気に静まり返った。

彼は気にもせず自分の席に着く。机の横にはいつも通り、重そうなスポーツバッグが置かれている。部活をしているわけでもないのに、一体何が入っているのか、正樹が以前不思議がっていた。

転校生　草薙速人は、これまたいつものように気だるそうに窓を見ていた。

始業式のチャイムがなり、全校集会のため体育館に集まるが、今日は騒がしさが抜けていなかった。皆、逸る気持ちを抑えることが出来ないのだろう。

教育指導の教師が何度も怒鳴っている。それぞれのクラス担任も怒鳴り散らして、なんとか宥めるに至った頃、俊介は体育館に入ってから20分も経っていたことを時計を見て知った。

壇上に校長が立つと、マイクの前で咳払いをする。その音がマイクで拡大され、体育館中に響き渡る。

「ええ、皆さんは我が校の生徒として、青春を謳歌することは実に素晴らしいことだと思います。ですが、それも時と場合によります。今後、このようなことがないことを願います」

厳かに校長の演説が始まると、俊介は早く終わることだけを願っていた。校長の話は長いだけで、それでいて実に要領を得ないのだ。

俊介が何度目かの欠伸をかみ殺したとき、叫び声が聞こえた。時計に目を落としていた俊介は顔をあげたとき、思わず瞬きをしてしまった。

壇上の校長が、音もたてずに青白い炎に包まれていた。あまりに

場違いな光景に俊介は、青白い炎は確か高温の時に出るんだよなと
考えていた。

校長が倒れると、辺りは混迷の極みに達した。生徒が濁流のよう
に、我先に出口に殺到する。その流れに俊介は倒れてしまう。

その痛みよりも、俊介は自分の見たものが信じられなかった。そ
して、また俊介の目の前で青白い炎が吹き上がる。

立ち上がると、数名の生徒が瞬く間に灰になっていく。その先には、
化け物が立っていた。全身が灰色の化け物だ。そいつが、槍の
ようなものを手にして生徒を襲っている。

「皆さん、掲示板は見ていただけましたか？」

マイクの音に、俊介は壇上を見上げる。そこには、同じクラスの
宇津木豊が立っていた。

「皆さんが神と崇めた人物は実は僕だったんです。リアルではイジ
メられていたけど、バーチャルの空間では僕は神だった。皆、普段
馬鹿にしている僕を、この僕を神だなんて崇めていたんだよ。はっ
きり言って、お前ら全員馬鹿だよ。まあ、いいや。僕はリアルでも
神のような力を入れたからね。さあ、数名の同士と共に、皆さ
んが心待ちにしていたショータイムの始まりだよ」

宇津木は笑っていた。笑いながら、顔に紋様と言つか筋のような
光が走ったかと思うと、化け物になった。壇上の宇津木を一体、何
人の人が見ていたかわからない。

俊介はとにかく、逃げようと思った。出口に向かおうとするが、
どこがそれなのか方向感覚が人の波に巻かれてわからない。

肩に手が触れられたような気がした。化け物かと思うと全身の毛
が逆立った。振り返ると、梓だった。

「俊介、逃げなくちゃ」

「逃げるたって」

人の波が一定の方向に流れ出した。流れの先を見ると体育館のド
アが開いており、校舎へと続く廊下に人だかりが出来ていた。

「あそこだ、梓、行くぞ」

思わず梓の手を握って、俊介は走り出した。

地響きがなつたかと思うと、二人の側を走っていた生徒が炎に包まれる。二人は、それを見ないよう前だけを見て走った。が、二人の前に照明器具が落ちてきた。足を止めて上を見上げると、羽が生えた化け物が、天井を突き破って両手に生徒を抱えて浮上していた。

「俊介、早く」

梓の泣きそうな顔に我にかえると、再び走り出した。足元に音を立てて何かがぶつかる。他の生徒と肩がぶつかるうが、足が纏れようがとにかく出口まで走った。

二人がようやく体育館を抜けて、廊下に抜けると同時に背後の出口から爆風が吹き付けてきた。転んで後ろを振り返ると、出口が瓦礫に埋まっていた。そこから、逃げ遅れた者たちの悲鳴が聞こえてくる。

俊介は怖気を奮うと、梓の手を再び握る。

「大丈夫か」

「うん。ありがと」

「とにかく、外に出よう」

二人が玄関にたどり着いた時、そこで人の流れが止まっていた。

玄関の戸が閉まっていた。

流星学園は、警備上の問題から、全てコンピュータ制御されている。おそらく、先ほどの爆発で異常を感知して、扉がロックされたのだらう。

この学園の生徒なら、誰もが正門前に入るときも、生徒手帳をパス代わりに機械に通過させなければならぬ。駅の改札口のような仕掛けである。

数名の生徒が扉を壊そうと、消火器をぶつけているが、防犯上の利点が仇となり扉はびくともしない。

「そんな、閉じ込められちゃったの」

梓が聞きたくない現実を突きつける。

「いいか、落ち着け。とにかく落ち着け」

俊介は自分に言い聞かせるように、言葉を吐いた。

ここで、取り乱したら終わりだ。

俊介は何かないものかと辺りを見回す。階段が目に入った時、皆に反して駆け上がっていく転校生。草薙の姿を目にした。

「おい！ どこに行くんだよ！ 危ないぞ」

俊介は草薙の行動が乱心したからだと思って、走り出した。もし、そうだとしたら助けてやらなくては。

「俊介」

梓の声に振りかえる。

「すぐに戻る」

そういうと、また走り出した。

草薙速人は教室に戻ると、自分の席に向かってスポーツバッグを開ける。そこには、アタッシェケースが入っていた。ロックを解除して蓋を開けると、携帯電話やベルト、4の字型の機械が入っていた。

速人はそれらを手早く取り出すと、ベルトに装着していく。ベルトを肩に担いで、教室をでようとしたときに、俊介とはち会った。

「お前、何してんだよ。早く逃げないと、化け物に襲われるぞ」

「逃げるってどこへ？」

俊介はそこで初めて草薙の声を聞いた。その言葉からは、他を寄せ付けぬ憐愍な響きがあり、この状況にも落ち着いている。自分の思い違いだったのかと思う。

「それは、まだわかんないけど」

「この学校は完全に封鎖されている。ヤラれたな。俺もこんな事態になるとは思っていなかった」

俊介は草薙の台詞を反芻する。

「どういうことだよ、お前、こうなるって知ってたのか？」

「人の話はちゃんと聞け。こんなことになるとは思っていなかったと言ったんだ」

「だったら、どうなるってんだよ」

「君と話しても、何も解決しない。俺を行かせてくれたら、この事態は治まる」

俊介はそこで初めて、草薙が肩に担いでいる物を見た。

「これは、なんだよ。お前、何しようってんだよ」

草薙はそれには答えず、さっさと出て行ってしまった。振り返りもせずに、

「携帯電話持つてるんなら、助けを呼べば」

そう言われて、俊介はすぐにポケットから携帯電話を取り出す。どこにかけていいのかかわからず、啓太郎にかけてしまう。

自分でもなぜかはわからない。ただ、警察にかけても信じてはもらえない。それは啓太郎も同じだが、それ以上はわからなかった。

「もしもし」

「あつ、小父さん！」

「俊介か？」

啓太郎の声は妙に間延びして、非現実的に聞こえてしまう。どちらかといえば、今直面している方が、現実離れしているというのに。「そう、俺。小父さん、いい、今から言うことはふざけてるわけでも何でもないんだ。だから、落ち着いて聞いてよ。今、学校に化け物がでて襲われてるんだ。もう、何人死んだかわからない」

「えっ、どういうこと？」

「もう、だから、化け物に教われてんだって。だから、警察か何かに連絡して助けてよ」

自分でも馬鹿なことをいっていると思うが、言わずにはいられなかった。

「わかった。今からそっちに行くから」

「いや、小父さんが来たって」

「いいから！ 今から、そっちにあるものを持っていくから、俊介

が皆を助けるんだ」

啓太郎の声は全てを呑み込んだような力強さがあった。

「それって、どういう」

「それはあとで、また、着いたら連絡する」

電話は切れてしまった。

俊介は啓太郎の言葉の意味がわからなかったが、とにかく梓のところに帰ろうと走り出した。

玄関に戻ると誰もいなかった。廊下には大量の灰が積もっていた。俊介にはそれだけで十分だった。ここにいた人間は、あの化け者に襲われたのだ。

梓だけはきつと逃げているんじゃないか。そう思いたかった。灰と一緒にリボンが落ちていた。梓のものだとは思いたくなかった。

俊介はリボンを取ると、その場にくず折れた。一緒に、梓も連れて行っていけば、こんなことにはならなかったのに。

音が聞こえた。かすかにだが、俊介の耳に入ってきた。誰か生きている人間がいるのだろうか。化け物かもしれない。俊介は転がっている消火器を手にとると、下駄箱の向こう側に回りこんだ。そこに、正樹が倒れていた。

「おい、正樹！　しっかりしろ！　正樹！」

「俊介、こりやどうなってるんだ」

「みんなは、ここにいたみんなは！」

正樹を抱え起こす。正樹は咳き込みながら、喋る。

「あいつらに、いや、あいつらだけじゃない、逃げた奴の中にも化け物がいたんだよ。それで、そいつがみんなを」

体育館に現れた化け物以外にも、まだいたのだ。それも、逃げ惑っているふりをしながら、確実に犠牲者を増やしている。

「それは誰だ？」

「ええ、ああ、もう、何、声が遠いんだけど」

正樹の顔が黒ずんだかと思うと、急速に質量が感じられなくなつた。自分の手のひらから、灰となって正樹だったものが零れ落ちていく。

「正樹：正樹！」

俊介は灰を握り締めて、泣いた。今までにないくらい泣いた。

「何がどうなつてんだよ！」

俊介には状況が飲み込めず、ただ、泣くしかなかった。梓も守れなかった。自分は二人も見殺しにしたのだ。

正樹の新聞記者になるという夢は永遠に途絶えた。自分が潰したのだ。

俊介は悔しさで、冷たいリリウムの床を拳でおもいつきり殴つた。

草薙は屋上に向かう階段を駆け上がっていた。体育館から空に舞い上がった奴がいるかもしれない。いきなり数人を相手にするより、まずは一人ずつ潰した方がいい、そう思ったからだ。

草薙が屋上の扉の前になると、一人の女生徒が扉を開けて出てくるところだった。だが、草薙が声を掛けるまもなく、灰になって崩れていった。半開きのままになった扉を、蹴り開ける。

草薙が屋上に出ると、そこにも散乱した灰や制服が散らばっていた。肝心の奴の姿はない。

空気を勢いよく吐くような音が聞こえて、咄嗟に草薙は横に転がった。彼がいた場所には、丸い穴が穿たれていた。

草薙は背後を見上げると、扉を覆っているコンクリートの上に奴の姿を見た。そいつは、蚊のような姿をしていた。

「ああ、おしいなあ」

モスキートオルフェノクが、残念そうに呟く。

「お前は、人間を襲って罪悪感を感じないのか？」

草薙はオルフェノクの姿ではなく、そこから地面に伸びる人間

の影に話し掛けた。その影には本来の人間の姿が映っている。オルフェノクが喋るときに発する現象である。

「あれ、この姿見ても驚かないんだ。へえ、こっちが驚いたなあ」
「答える！」

草薙は世間話をするような感覚で、へらへらしているオルフェノクが憎かった。

「罪悪感か。じゃあ、聞くけど、俺がイジメられている時に、お前らは感じたのか？ お前らは俺を人間じゃない扱いをしたじゃないか。俺を全否定したくせに。だから、俺もそうしたんだ。俺は本当に人間じゃなくなつたから、今こそお前らに復讐してやるんだ」

「そうか。わかった」

草薙は肩に乗せていたベルトを両手に持つと、腰に当てベルトをしめた。モスキートオルフェノクが、不穏な表情で見ている。

彼はブレザーのポケットから、携帯電話を取り出すと、横にスライドさせる。ボタンが現れると『913』と打ち込む。

『Standing by』

電子音声が携帯電話から零れる。そして『enter』ボタンを押す。

「変身！」

草薙は携帯電話をベルトに差し込む。

『Complete』

体中を黄色のフォトンブラッドが駆け巡ると、草薙の姿は変化していた。全身に黄色のラインが入り、顔には紫色の隻眼、その上にギリシヤ文字のXのようなマーク、機械の鎧をまとった。

「なにそれ、聞いてないよ」

モスキートオルフェノクが心底驚いたようだった。飛び降りて、草薙と同じ目線に立つ。

「ああ、俺だって、初めてだからな」

草薙はそういうと走り出した。モスキートオルフェノクは、口元についている針を飛ばした。それを前方に飛び込んでよけると、受

身をとり起き上がると、携帯電話に挿入されているミッションメモリーを取り出し、脇につけてあった4の字型の機械に差し込む。携帯電話をスライドさせて『enter』を押すと、黄色の刃が生えてきた。逆手持ちの剣になったのだ。

「そんな武器とか聞いてないって。お前、何なんだよ」

「オルフェノクに、そんなこと聞かれるとは思わなかった」

モスキートオルフェノクは、針を何個も飛ばしてきた。草薙は全てを払い落とすと、一気に間合いを詰めようと駆け出す。

針の攻撃は止まないが、それでも的確に払っているからこそ、徐々に差が詰まってきた。そして、あと一步踏み込んだ所で、草薙が刃を振り落とす。が、モスキートオルフェノクは空に舞ってしまう。「危ねえ、死ぬかと思った」

草薙は携帯のボタンを押す。轟音と共に、砲弾がモスキートオルフェノクを貫く。何が起こったのかわからず、再び屋上に落ちてくる。

草薙の武器はこの鎧だけではない。専用バイク、サイドバツシャーを呼び出したのだ。バトルモードに変化したバイクから放たれた砲弾に奴は当たったのだ。

草薙は『enter』を押す。

『exceed charge』

合成音声が冷ややかに告げる。

剣についているコックキングレバーを引く。ようよう起き上がっているモスキートオルフェノクに向かって、トリガーを放つ。

黄色の弾丸がモスキートオルフェノクに当たる手前で止まる。身構えていた分、拍子抜けしてしまう。

「冗談キツイって。当たる前で」

最後まで言い終わる前に、細長い弾丸の後部が花卉のように開く。体の自由が利かなくなったことに戸惑う。

草薙は剣を構えると、その光の花卉の中に走りこむ。

モスキートオルフェノクの目には、の残像しか見えなかった。

再び、体に自由が戻ったときには、青白い炎が吹き上がり、ぼろぼろと体が崩れていった。

オルフェノクの背後で草薙は、もう人ではないとはいえ、それでも人間を殺してしまったことが悲しかった。

感慨に耽っている場合ではないと思い直し、後ろを振り返らずに屋上を後にした。

啓太郎はオートバジンに跨って、急いで流星学園に向かっていた。荷台にはアタッシェケースが括り付けられている。一応、出る前に警察にも電話を入れておいた。後々、面倒なことになるのは嫌なので、匿名で数十年前の再来が流星学園で起こっているとだけ伝えた。法定速度ギリギリで走っているので、几帳面な啓太郎の性格が現れているが、気持ちは一刻の猶予もないと焦っていた。

たつくん、遂にきたんだね。このときが。

啓太郎の胸には、妙な懐かしさと悲しみが渦巻いていた。

梓は弓道部の部室に隠れていた。混乱の中、とにかく武器になるものをと思って、ここにきたのだ。弦と弓矢を手にしたまま、今は床に座り込んでいる。

どうして、こうなってしまったのか。玄関で俊介を待っていた時、音もたてずに一瞬で目の前の生徒が灰になった。あの化け物が追ってきたと思って、逃げた。逃げるときに、隣のクラス、俊介の友達の正樹が倒れるのが見えた。なのに、私は逃げてしまった。

見捨てたんだ。自分が助かりたい一身体、彼を見捨ててしまった。俊介も多分、今ごろ。いや、俊介はあの場にはいなかった。もしかしたら…。

梓は自分の浅ましい妄想に反吐が出そうになり、涙を流しながら心の中で正樹に謝っていた。

俊介は化学室に隠れていた。体育館と校舎はコの字型になっており、ここが一番体育館を見るときに死角が少なく、かつ安全に見ることができると思ったからだ。

恐れや悲しみよりも、憎しみが勝っている。どうにかして、あいつらを潰してやろうと俊介は思っていた。

だが、体育館はカーテンが閉まって、扉も閉まっているため、中が見えない状態だった。奴らが暴れまわって壊しているかも思ったが、完全にあてが外れてしまった。

啓太郎もこつちに来るみたいだが、一体何をしに来るんだろう。それよりも、警察、いや自衛隊にでも電話してくればいいのに。

そういえば、転校生は無事だろうか。現時点で、俊介が知っている生き残りは彼だけだった。まだ、生きていればだけ。

爆発でガラスが砕け散る振動が体を震わせる。思わず、床に突っ伏してしまう。刹那、化学室の近くであったわけで、周りを見渡すと何も変化はなかった。安堵して、溜息をつくとき足音が聞こえてきた。

俊介は身を硬くする。奴らか、もしくは。

「誰かいるのお。匂いがするけど、よおし、かくれんぼだね。鬼に見つかったら、死んでもらうけどいいよね。いいともお！」

最悪の状況だった。化け物だ。武器になるような物は何も無い。

考える、落ち着いて考える。

足音はどんどん近づいてくる。ガラスを叩き割る音や、踏みしめる音もする。

辺りを見回したとき、目についたものがあつた。でも、実行に移したら死ぬかもしれない。それでもいい、奴らの一人や二人、道連れにしなければ気が済まない。

俊介は、早速行動を開始した。

今年、入学したばかりの阿藤進は、物を壊すのがこんなに楽しいことだとは知らなかった。今まで虐げられてきて、どうして自分がこんな目にあうのだろうと、そればかり考えていたのだ。

でも、今ならそのクラスメイト達の気持ちがわかる。何かを壊すことへの快感。暴力への欲求。

皆、僕を壊したかったんだ。確かに、壊れたけど、それと引き換えに別のものになっちゃったけど。

阿藤進、ドッグオルフェノクは、自慢の嗅覚で生徒の存在を嗅ぎ付けていた。気晴らしに窓ガラスをわりながら歩いていた。オルフェノクの力の前では防弾ガラスも意味がなかった。

阿藤は匂いがどんどん近くなることに嬉々としていたが、別の匂いも感じていた。

人間の匂いじゃないな。なんだろ、これ。

しかし、阿藤は自分の能力に力に溺れていた。少しくらいのことでは自分は死にはしない。死への恐怖も無い。なぜなら、一度死んでいるからだ。

匂いが今までよりも、一番強く感じられた。プレートを見上げると、化学室だった。阿藤は扉に手をかけると、ほくそえみながら一気に扉を開いた。

「はい、鬼さんの登場ですよ。悪い子はいねえかあ！」

阿藤は一人の生徒が堂々と立っているのが見えた。

「ええ、もう終わり。つまんないよう。隠れてくれなくちゃ、かくれんぼにならないでしょ」

「なあ、知ってるか。かくれんぼって一人でやると、つまんねえんだよ」

そいつは、そういうと口元を歪めた。それは笑いの形だった。阿藤は、この力を手にして自分が頂点に立ったつもりだった。それでも、今のこの姿を見ても笑っていられる、その男を心底憎いと思った。

「死ね」

「鬼さんこちら、手のなるほうへ」

男は手拍子をしながら、囃子たてる。完全に頭にきた阿藤は走り出す。

そのとき、男がポケットからライターを取り出した。

「くたばれ！」

カチッと音がして火がつくと、目の前が炎で包まれた。

化学室は大音響と共に、爆発した。

草薙は音楽室でコオロギの形をしたオルフェノクと闘っていた。銃型の武器を持っていて、超振動の弾丸が窓ガラスや壁を貫くと、一瞬にして破壊されていく。

草薙もブレイガンを『Burst Mode』に切り替えて応戦する。それでも足りないと思い、携帯電話をベルトから外し、変形させてフォンプラスターにして二挺拳銃でやりあっていたが、もはや、机やピアノはボロボロで隠れる場所もない。部屋で闘うというには、二人の力は強すぎるのだ。

「もう、いい加減に諦めたら？ おたく、誰かしんないけど、無駄だよ」

そういうと、オルフェノクが放った弾丸が草薙の手に当たった。

思わず、ブレイガンとフォンプラスターを落としてしまう。

「さあ、諦めな。まあ、普通の間人みたいにあっさり殺すのはつまんなかったけど、君はなかなか楽しかったよ」

そのコオロギのオルフェノクは、口元から本物のコオロギのような甲高い音をさせて近づいてきた。笑っているのだ。

突然、轟音が音楽室を襲った。オルフェノクは怯んで、一瞬歩みを止める。

草薙は、ブレイガンからミッションメモリーを抜くと、ベルトの脇につけてあるデジタルカメラを外してメモリーを挿入する。携帯

電話の『enter』を押す。合成音声が入る。飛び込んで前転する。

オルフェノクもその一瞬の動きに反応するが、銃口を向けたときには草薙が懐に入りすぎていた。

草薙の肩口に銃口が乗っている、地べたに腰をつけた半端な姿勢で右手をオルフェノクの腹に据えると零距离パンチを放った。

の文字が現れると、青白い炎とともに消えていった。

草薙は、ブレイガンと携帯電話を回収すると爆発したことを思い出し、原因は何かとベランダに進む。すると、中庭にあのクラスメイトが倒れていた。衣服はボロボロで生きているのか怪しかった。

あいつがやったのか。それとも、襲われたのか？

草薙が見ていると、少し動いたような気がした。

まだ生きている。生きているのなら安全な場所に移してやろう。

犠牲は少ないにこしたことはない。もはや、気休めにもならないだろうが。

草薙はベランダから中庭に飛び降りた。

俊介は、夢を見ていた。

幼い頃に、啓太郎の家に初めて来た日のこと。あの時は、確か住み込みで働いている人が二人いた。名前はなんだっけ？

啓太郎に聞いたことがあった。どうして、俺を引き取ったのか。

「理由なんてない。ただ、俊介には教えておきたいことがある。時がきたらだけだ」

それがどういう意味なのかはわからない。ただ、なんとなくこの人になら、少し甘えてもいいかと思って思えた。

顔が熱いと思うと、全身が熱をもって鈍い痛みを発していた。体を動かそうとするたびに、鋭い痛みが変わる。

目を開くと、誰かが歩いてくるのがわかった。誰だろうと、焦点を合わせようとするのだがぼけてしまう。

「おい、生きてるのか？」

その声で完全に目が醒めた。そうだ、化け物は！

「誰だ！」

反射的に身を引いてしまいが、体が思うように動かない。

「頭、打ったのか？」

「あつ、ああ、転校生か」

俊介は安堵の溜息をつくと同時に嬉しさがこみ上げてきた。

「生きてたんだな、良かった。そうだ、俺、一匹倒したぞ」

「あれ、お前がやったのか？」

草薙は炎を吹き上げている教室を指差した。

「そうだよ、ガスを充満させて、フツ飛ばしてやった。ざまあみろ！」

「倒したところを見たのか？」

「いや、それは……」

二人の後ろで地響きがあった。

振り返ると、そこには、上半身の半分が焼け爛れたドッグオルフ

エノクと、騒ぎを聞きつけて集まってきた、モンキーオルフェノク、

そして宇津木　　チーターオルフェノクが立っていた。

「誰が死んだって？」

苦々しそうにドッグオルフェノクが呟いた。

「嘘だろ」

俊介は心底驚いた。死を覚悟した捨て身の攻撃に、相手は多少怪我した程度だったからだ。

「これはこれは、菊池に転校生の……草薙だ。そうだ。思い出した。

意外な取り合わせだね。でも、ここまで生き残ったことは凄いね。

それに、俺達相手に深手を負わせられるとは、いやいや予想外も甚だしいね」

宇津木はそう言うと、拍手をした。

「で、残りの奴らはどうしたんだ？」

隣にいる二人に問い掛けるが、誰も答えない。

「それなら、俺が倒した」

草薙はいともあっさりと答える。

「はあ、君が？ 人間の君がかい」

「今から、お前らが捨て去った人間の可能性を見せてやる」

草薙はブレザーのポケットから携帯電話を取り出し、『913』とキーを打った。

『Standing by』

宇津木は何が起こるのか、また何ができるのかという期待でわくわくしていた。

俊介は転校生が突然、携帯電話でどこかに連絡をとるのかと思っただとしたら、タイミングが悪すぎるだと毒づく。

「変身！」

草薙が携帯電話を腰のベルトに挿入すると、黄色いラインが全身を駆け巡った。あまりの眩しさに俊介は目を覆った。

『Complete』

俊介が目を開けると、そこには鎧をきた人間がいた。

「えっ、転校生？」

「つい、間の抜けたことを言ってしまう。」

「そんなの聞いてないって。草薙、それ何？」

「お前達と対等に戦える力だよ」

草薙は、内心不安だった。相手は三人、こちらには負傷したクラスメート。分が悪すぎる。

「おい、走れるか？」

草薙は後ろの俊介にむかっていう。

「えっ、ああ、とりあえずは」

「俺が合図したらとにかく遠くへ逃げろ」

「わかった。でも、お前は」

草薙は問いには答えず、ミッションメモリーをブレイガンにセットすると、三人に向かって打った。

「走れ！」

俊介は立ち上がると、走った。体中が悲鳴をあげているが、かまわずに走った。

草薙が三人に向かって走り出すが、気付くと二人になっていた。あとの一体は。

「まさか」

草薙が後ろを振り返ると、クラスメートの目の前にドッグオルフェノクが立っているのが見えた。合図を送るため、視線を外した一瞬の内にジャンプしていたのだ。

「よそ見は危ないよ」

すぐ側で声が聞こえたと思ったら、体が宙を飛んでいた。校舎の壁に激突する。背中に衝撃が伝わり、息がつまった。

俊介は目の前で仁王立ちにしているドッグオルフェノクに、今度こそ本当に死を覚悟した。

ドッグオルフェノクが、拳を振り下ろしてくる。目を硬く瞑る。マシンガンのような音がした。

目を開けると、ドッグオルフェノクが吹き飛んでいた。空から、人間が舞い降りてきた。それは、人間ではなくロボットだった。

「今度は何なんだよ」

ロボットは左手に持っていたアタッシェケースを、俊介の目の前で落とす。

「それで変身しろ!」

声の主を探していたら、外壁によじ登っている啓太郎を見つけた。「小父さん! どうなってるんだよ!」

俊介の思考回路は焼け付きそうだった。考えているそばから、何かが起こって、処理する暇も無い。

「そのケースを開ける!」

俊介はもう考えることを放棄した。ヤケクソ気味にケースを開けると、そこには携帯電話とベルトが入っていた。

俊介はデ・ジャヴに襲われる。

これって、確か、転校生が持ってたのと同じものか。

「ベルトをつける」

俊介は、ベルトを取り出して、腰につける。

「携帯電話を開いて『555』を押せ」

俊介は自分を置いてきぼりにして、それでも進んでいくときに腹が立ってきた。

「うわあああああ！」

俊介は、言われたとおり『555』を押す。

『Standing by』

転校生のは違う合成音声が聞こえた。

「ベルトに差し込め」

俊介は携帯電話をベルトに差し込む。

その瞬間、赤いラインが体中を覆う。

『Complete』

気が付くと、自分の体に鎧がついていた。

「これは…」

「それで、闘うんだ！ オルフェノクを倒すんだ！ うわあ」

あまりに力が入りすぎて、啓太郎が外壁を落ちていく。

「闘えっつていわれても」

戸惑っている俊介の背中に衝撃が炸裂する。吹き飛んで、植木の中に倒れてしまう。

「お前らはどうなってんだよ」

ドッグオルフェノクも動揺している。いや、その場にいた全員が動揺していた。

草薙は自分以外にもベルトを持っている人間がいることは知っていたが、こんなに近くにいるとは思わなかった。

俊介は起き上がると、ドッグオルフェノクを睨みつける。

「くっそ」

俊介は駆け出して、ドッグオルフェノクの顔に拳を入れる。見事に命中して、ドッグオルフェノクは吹き飛んだ。

自分がしたことなのに、それほどの威力があることに驚いてしま

う。

本当にこの力は何なんだ。

草薙は起き上がると、ベルトから双眼鏡を取り出すと、ミッションメモリーをセットする。すると、双眼鏡が変形して、鏡の部分が伸びたような形になる。

それを、右足にセットする。その動きに反応して、チーターオルフェノクが襲い掛かる。

しかし、それは寸前の所で停滞してしまう。オートバジンを、連射銃で攻撃したからだ。

草薙は携帯電話をスライドさせ、『enter』を押す。

『exceed charge』

重いくぐもった合成音声が聞こえると、黄金の光がベルトから右足の双眼鏡に流れていく。草薙は思いつきり、右足を回し蹴りの要領で振り切る。

光の弾丸が起き上がったドッグオルフェノクの目の前で止まると、とたんに光の後部が花卉のように開いていく。

草薙は、地面を蹴ると空高く舞い上がる。一回転すると、右足を蹴りの構えで固定し、光の花卉に吸い込まれる。

の紋様が現れると、草薙はドッグオルフェノクの後ろに立っていた。ドッグオルフェノクの断末魔の悲鳴が聞こえてくる。

草薙は俊介の側に寄ると、

「お前はサポートだけでいい。倒すのは、俺がやる」

それは、草薙のせめてもの優しさだった。自分はもう戻れないのだ。

「格好つけんな。転校生だけの問題じゃない」

俊介は、その思いに気付いていたから、納得できなかった。

「わかつてるのか！ 奴らを倒すってことは、人殺しと同じなんだぞ」

「仲間割れかい？」

チーターオルフェノクが退屈そうに言う。

「なあ、お前、宇津木だよな。どうして、こんなことをした？」

俊介は今までの疑問をぶつけた。

「どうして？ 先にやったのはそっちじゃないか。俺をイジメたからだよ。俺が何をしたっていうんだ？ ただ、目に付いたから。それだけで、俺という存在を否定されたんだ。だから、力には力で対抗したんだ」

俊介は走り出していた。仮面で隠された目元からは涙があふれていた。チーターオルフェノクに殴りかかる。だが、足がとてつもなく速い彼はあっさりとかわす。

「馬鹿野郎！ そんな勝手な言い分があるかよ！」

「勝手なのはそっちじゃないか！ イジメられるほうは、だまっでなくちゃいけないのか？」

「それじゃ、そんなんじゃ、お前のやってることはイジメてる奴らと同じじゃないか！」

力には力で返す。それが絶対の法則だと思っていたチーターオルフェノク…いや、宇津木には意外に感じられた。

「俺は同じクラスだけど、お前がイジメられているのは知らなかった。今更だけど、知っていれば絶対に止めたのに。俺は、自分が情けない」

俊介は自分のスピードが追いつかないのも関係なく、殴りかかっていた。

「詭弁はよしてくれ。誰も助けられやしない。現に菊池はこの状況で、誰かを助けられたのか？」

「俺は、お前を助けたいんだ！」

俊介の拳が宇津木の顔面に刺さる。尻餅をつく宇津木。

「嘘だろ。俺の仲間を殺したくせに、俺だけどうして助けたいんだよ！」

「他のやつらのことは知らねえけど、お前は俺にこう言ったよな。笑っていればきつと幸福がくるって」

それは、英語の授業のレクリエーションの時に、二人一組になっ

て、自分の思いを英語で伝えるという趣向だった。その時に、俊介は宇津木とペアになった。彼は恥ずかしそうに少し笑いながらそういったのだ。

「あの時のお前はどうしたんだよ。どうして、化け物になっちまったんだよ」

「うるさあい！ そんなものがないとわかったからだ。この世界はどこまでいっても、力の弱いものが泣きをみるってわかったから。だから、俺達は、集まったんだ。この学校でイジメられている、同じ思いをしている人間をインターネットで集めたんだ。それで、一緒に死のうとしたんだ。でも、死んだと思ったら、俺達にこんな力が備わっていたんだ。これは神様が俺達にくれた最高のプレゼントなんだ」

宇津木の頭の中をいままでの出来事が走馬灯のようによぎって行く。インターネットのコミュニティサイトで応募者を集めた時、正直誰も送ってこないと思っていた。次の日に恐る恐るページを見ると、四人も応募してきた。

彼らとチャットで会話した時に、一緒に死のうと提案をした。これは逃げるのではなく、来世でこんな形ではなく、しっかりと皆に認められて生活し、そこで再び出会うために。いわば、この世の現状はバグが発生しているだけなんだと。

決行日に、はじめて出会った彼らは、鏡で映したような同じ顔ばかりだった。早く、この世から消えてしまいたい。そういう表情だった。

電車で行ったこともないほど、遠くの海にいった。その断崖から一斉に飛び込んだ。遺書も何も無い慎ましい最期だった。

だが、死んだと思ったのも束の間、崖に這い上がると皆も生きていた。ただ、人間の姿はしていなかったが。

「お前は、自分の弱さに負けたんだ。俺は怖くなんかねえぞ。そんな姿でも、宇津木は変わらなんだよ。いくら力をてにしたって、大事なことがわかってねえ！」

俊介がそう叫んだ時、空気を裂くように大音響が切り込んできた。「容疑者に告げる。君は包囲されている。大人しく投降しなさい」拡声器で増幅された声には抑揚がなかった。機械が喋っているようだった。

俊介は空を見上げると、空飛ぶバイクに乗った鎧をきた人間を見た。それが、何台も飛び交っている。辺りに目を向けると、同じ姿の者が何十人もこっちに向かってくる。

「従わない場合は、こちらも容赦しない」
草薙がこっちに向かってくる。

「おい、警察だ。警察がきたぞ」

「あれが警察かよ」

「ああ、ライオトルーパー部隊だ」

「そんなのありかよ」

俊介が宇津木を見下ろすと、彼は何かを考えているようだった。ただ、地面の一点を見つめている。

「宇津木、俺が見ていた限り、お前は誰も殺してない。だから、警察に自首しろ。迎えには行ってやるから。まだ、やり直せるんだ」

俊介が手を差し伸べると、宇津木はその手を弾いた。

「うるさい。俺だけ、俺だけがこのまま終われるかよう！」

宇津木は起き上がると、ライオトルーパーに向かって走り出した。

「宇津木いいいいい！」

俊介が追いかけてよとすると、草薙が羽交い絞めにする。

「おい、逃げるぞ！」

草薙が後ろに強引に身を引かせるが、俊介は前に宇津木を追いかけてかかった。

ライオトルーパー達が、一斉に足を蹴り上げると、宇津木の周りに黒い花弁が何十本と生えていた。

「やめろううう！」

まったく同じ動作で、ライオトルーパー達が飛び上がり、花弁に向かって蹴りつけてくる。

宇津木が青白い炎を吹き上げるところを俊介は見ることなく、草薙に連れられて校舎に戻っていった。

数ヶ月が経ち、学校が再開された。

事件の爪あとは目立ち、まだ完全に補修されてはいなかった。

あの事件のあと、警察に事情を聞かれたが、何も答えなかった。というより、ショックが大き過ぎて何も喋れなかった。

生徒や教師の大半が犠牲になり、学校に登校しても寂しいものがあった。でも、変わりに梓が生きていたことが嬉しかった。彼女はずっと、部室に籠っていたそうだ。

草薙にはずっと会えなかった。

啓太郎もあまり多くを語ってくれなかった。

それでも時は進み、昼休みになった。草薙は相変わらず、退屈そうな顔をして窓を見ていた。梓が楽しそうに何かを喋っている。その全てが、どこか現実味のない、音の無い世界だった。

「それにしても、あいつも馬鹿だよな。復讐だって。やることがエゲツないねえ。やっぱり、ああいうのがキレたら何するかわかんないタイプなんだよな」

初めて聞こえた音に顔を向けると、黒川とその取り巻きが笑っていた。

「宇津木が化け物だったなんてな。俺らって、案外正義の味方に向いてるかもよ」

また、笑い声。

俺は、席を立つと、黒川の前に立った。

「どうしたんだよ？」

黒川がそういった気がしたが、かまわなかった。俺は渾身の力を込めて殴った。椅子ごと床に転がっていく。

「恥を知れ！」

俺はそれだけ言うと、教室を出て行った。

そうだ。俺にはまだ、やらなければいけないこと、知らなければいけないことが沢山あるんだ。宇津木達のためにも。久しぶりに戻った現実に、毅然と俊介は向かっていく。

(了)

(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

この駄文を最後まで読めたあなたは、素晴らしい忍耐力を兼ね備えているのでしょね。これ以上に世の中で辛いことはないですよ。

(本人が言うなよ)

では、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2673m/>

葬列の子供達

2010年10月8日14時31分発行